

宗像市の花カノユリの里づくり 改訂版



宗像市固有のカノユリには、
花色に多くの変異が見られます



令和2年2月 宗像カノユリ研究会



目 次

宗像市の花「カノコユリ」とは	1
宗像市固有のカノコユリ	2
カノコユリの繁殖	3
種を播いてみよう	5
球根を植えてみよう	7
10年間の活動	9



宗像市の花「カノユリ」とは

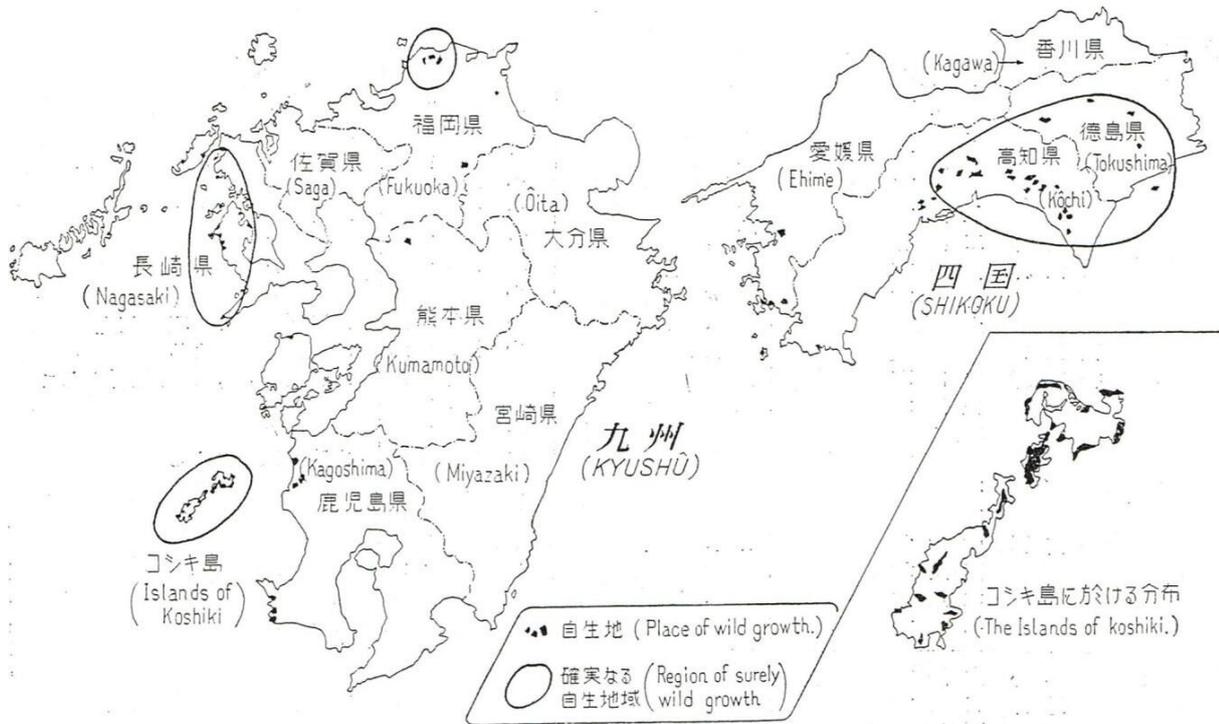
日本に自生するユリは、15種類あります。そのひとつにカノユリがありますが、これを漢字で書くと「鹿の子百合」となります。花びらの内側に、子鹿の背中の柄に似た模様があることから名づけられました。

宗像市の花は「カノユリ」、これは昭和56年に決められました。昭和56年2月に市の樹・市の花の公募が行われ、市の花は136点の応募の中から選考委員会の協議を経てカノユリに決められ、4月から施行されました。

カノユリが選ばれた背景として、宗像市は全国でも珍しいカノユリの自生地であることが、決定の大きな要因となったようです。

カノユリは、九州（福岡県・長崎県・鹿児島県）と四国（徳島県・高知県）のごく限られ

た地域にのみ自生する希少な植物で、今では絶滅が危惧される絶滅危惧種に指定されています。



第1図 本邦におけるカノコユリの自生分布
Distribution of wild plants of *Lilium speciosum* in Japan.

資料：九州農業試験場園芸部のカノコユリ現地調査（1953年）報告書

市の花に指定された当時もすでに、自生のカノコユリは急速に減少してきており、宗像で確保し流通できる球根は全くありませんでした。このため、県外（鹿児島県等）から4000球の球根が導入され、市民に配られた経緯があります。しかし、その大部分はカノコユリに適した場所に植えられていないこともあって枯死し消失して、市民が目にする機会は限られています。

カノコユリが減少した要因は人の活動と関係が大きく、人里の開発や農業の機械化に伴う自

然環境の変化によって、カノコユリの好適な環境が維持できなくなってきたことです。

宗像市固有のカノコユリ

平成22・23年に九州大学と宗像市等により宗像市におけるカノコユリの実態調査が行われました。採集されカノコユリの葉を九州大学でDNA検査された結果、多くは他県由来のカノコユリでしたが、数か所のカノコユリのDNAが宗像市由来のものであることが判明しました。

この宗像由来のカノコユリを宗像固有種と呼ぶこととし、宗像市とむなかた水と緑の会では固有種の保存、増殖及び普及を図る活動を始めました。



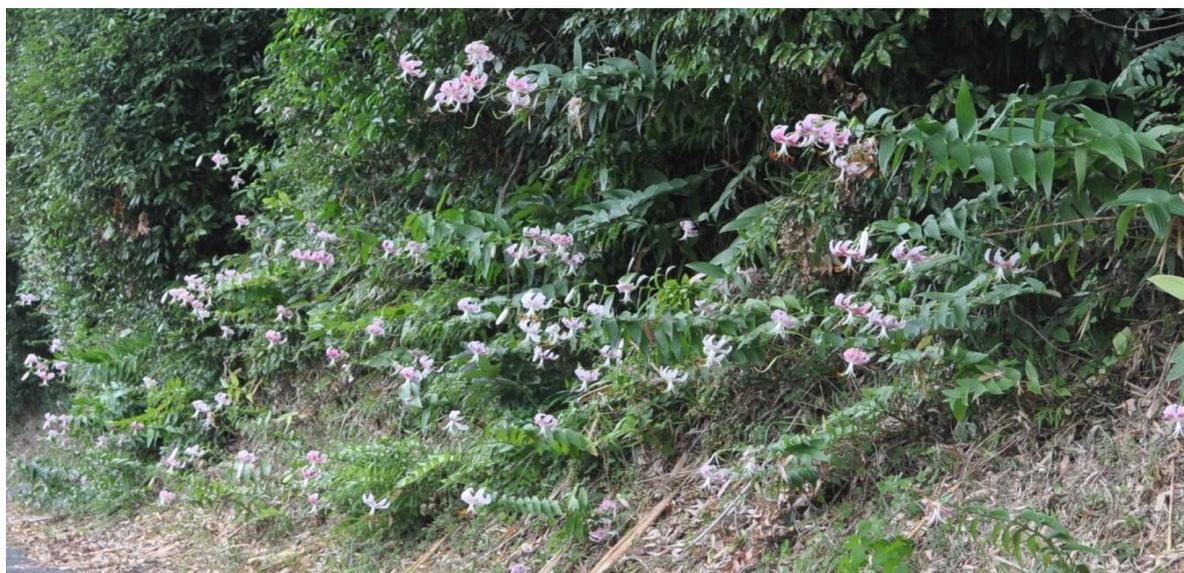
カノコユリの好適環境

カノコユリは、生育環境をすごく選びます。適した環境では自然増殖して広がっていきますが、適さない環境下では直ぐに絶えてなります。

カノコユリが自生し繁殖しているところの環境を見ると次の通りです。

- ① 東向きの斜面で、上部に雑木が茂り、西日や真上からの太陽光をさえっている。
- ② 粘土分の多い土壌で水持ちが良いが、傾斜地で排水が良いところ。

好適環境の土地に植え、関心を持ち、草刈りや日照調節など、ほんの少し人が手を加えれば、自生地が広がってゆきます。カノコユリの花が咲く里づくりのためには、カノコユリに対する正確な知識と維持しようとする意志を持った人の手助けが必要です。



人里の道路の横に咲くカノコユリの群生。草刈りなどの手が入って維持されている

カノコユリの繁殖

カノコユリの繁殖には、分球、木子、リンペン、種子による方法があり、通常は、木子及びリンペン繁殖が行われています。一方、実生繁殖は大量生産が可能ですが、開花までに長期間を要し5年目でやっと開花します。このため、種子を高温処理して小球根が生じた種子を播く方法をとると、開花までの期間が1年間短縮されて4年目で開花してきます。

1 種子繁殖

1 1月上旬に採取した種は休眠しているため、すぐに播いても夏を越さないと発芽してきま

せん。秋になると地中で発芽し小球根を生じますが、すぐにまた休眠し地上への発芽は冬の低温を受けて、春になって地上に発芽してきます。しかし、35℃→25℃の温度処理を行うと2月には地下発芽して小球根を生じます。

これを2月に播くと3～4月に地上発芽してきます。温度処理を行ったものは、1年目に1枚の細長い葉は出て、秋には地上部が枯れて休眠します。

2年目は1月～2月に発芽してきます。大部分は一年目よりは幅広い1枚葉ですが、中には茎が伸長し数枚の葉が出るものが見られます。

3年目にはほとんどが茎立ちしますので、11月に掘上げ植替えを行います。

4年目には開花してくるので、6月に蕾を折りとり球根の肥大に努めると、秋には開花球として活用できる大きさになります。

自然状態での実生から開花までの生育状況



1年目 ⇒ 2年目 ⇒ 3年目 ⇒ 4年目 ⇒ 5年目
地下発芽 1葉出芽 広葉出芽 茎立ち 1輪開花
(温度処理では : 1年目 2年目 3年目 4年目)



種まき



間隔調整



播種後3年の球根

2 リん片繁殖

繁殖に用いるりん片は、外側の良く充実したものをを用いて行います。りん片を手で根元から一枚づつていねいにはがします。周囲20cm球で10～15枚程度のが得られます。内側のりん片は良い球根が得られないので、外側の大きなりん片を利用します。りん片繁殖は気温の高い時ほどよいが、球根の肥大時期との関係で9月に球根を掘り上げて行います。



外側の大きいりん片を備用



りん片を植えた状態



土球根が生かすためのりん片

3 木子繁殖

カノコユリは、球根の下に出る下根と球根の上の茎からでてくる上根があります。その上根の茎の根のもとにできた小球根が木子です。



通常数個の木子が出る 植付深さと木子の着生状況 木子の直径の3倍の間隔で植える

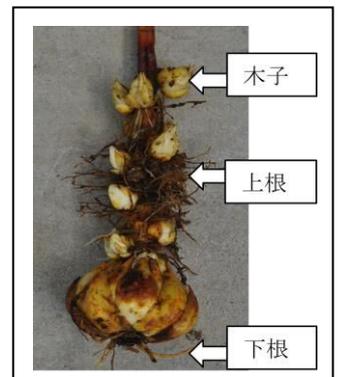
木子繁殖は最も簡単な方法で、親球があれば木子で増殖できます。木子は球根の茎に必ず付いているとは限りませんが、球根の植付深さと関係が深く、深植えほど着生が多い傾向にあります。

プランターに植える場合は、木子の直径の3倍の間隔・3倍の深さに植えます。用土は、赤玉土小粒、鹿沼土、腐葉土を1：1：0,5の割合で混合したものを用います。

球根の植え込み

球根の植付は10月が最適です。遅くとも11月には植えるようにしてください。ユリ類は、球根の下と球根の上の茎から根が出ます。肥料を吸収するのは茎からでる上根です。そのため上根が十分に張れるよう深く植えるのが大切です。

植付深さは、球根の高さの2～3倍の深さに植えます。また、3～5球程度まとめて植えた方が豪華になります。植付後は地表面に陽が当たらないように、必ず堆肥等でマルチして下さい。



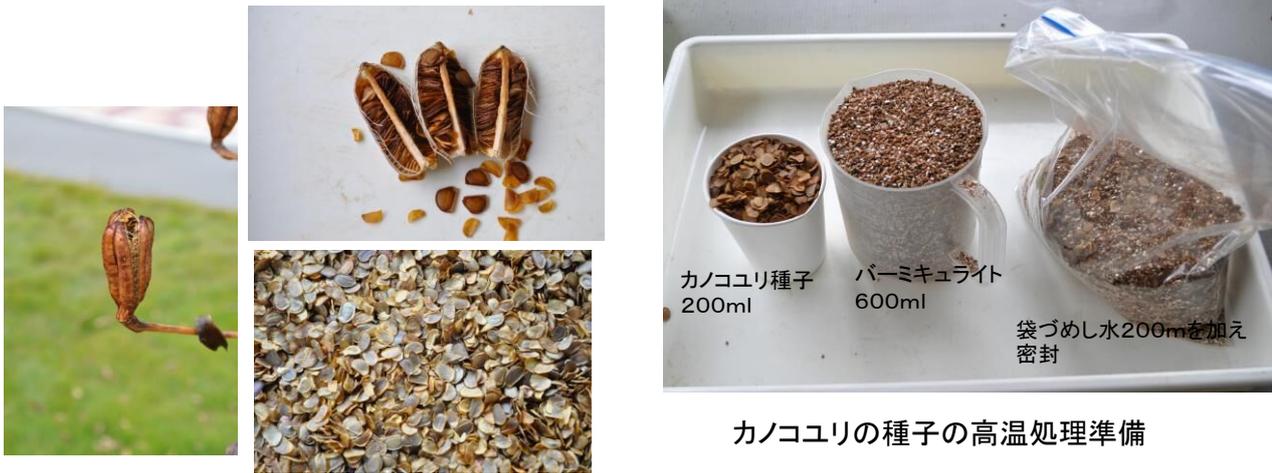
種を播いてみよう

カノユリは、7月～8月に花を咲かせ、9月～10月に莢が肥大、11月に成熟して種子が飛散します。種を播く場合は、11月になって莢が開き始めるころに莢ごと取り、日陰に干し中の種をとりだします。種には充実して胚乳がある種と未成熟で胚乳がない種があるので、未成熟の種を除きます。

収穫した種は休眠状態で、夏の高温を経ないと発芽してきません。自然状態では、種を採った1年後に地中で発芽しますが、地上に葉が出てくるのはさらに半年たった春になります。このため、採取した種の発芽を1年間早める方法として、人工的に夏の高温状態におく温度処理を行うと2～3か月後に発芽し、1年間発芽を早めることができます。

温度処理の方法

- ① 11月下旬頃から温度処理を始めます。種が発芽するには水分が必要なため、種に種の量の3倍のパーミキュライトと、種と同量の水を加えて混ぜビニール袋に入れます。
- ② 処理する温度と期間は次の通りです。35℃に2週間、その後25℃に置くと4週間ほどで発芽が始まります。発芽が揃うまでさらに4週間置くと、ほぼ発芽してマッチの頭くらいの大きさの小さな球根ができます。温度処理は、市販の恒温器を用いるか、自宅にあるもので代用します。電気座布団か電気アンカ、ハッポースチロール箱、それに温度調節用のサーモスタットがあればできます。



カノキュリの種子の高温処理準備



種子の温度処理

高温処理35度2週間
→ 25度8週間



採取した種子と高温処理により休眠がやぶれ発根した種子(2月)

- ③ この小球根はまたすぐに休眠します。この休眠を破るため10℃くらいの低温に6週間ほど置く必要がありますが、11月下旬から温度処理を始めると2月には発芽(小球根の発生)が揃います。2月は低温期なので、低温処理は行わずに小球根を庭や鉢等まき、自然低温に合わせます。

鉢やプランターの場合は、鹿沼土1・赤玉土1・腐葉土0.5を混ぜた用土に播き、種が見えなくなる程度の覆土をして半日陰の場所に置きます。



種を箸で5列×5列(25個)に並べる



種が見えなくなるように覆土をする



発芽状況(5月2日)



3年生:3月25日

3年生



3年生:7月22日

- ④ 種を播いた鉢は、午前中は日が当たるが、午後は日陰になる所に置きます。
- ⑤ 4月に幅5～6mm・長さ5cmほどの細長い葉が1枚出てきますが、この葉は7月から8月の高温期には枯れ、地中に1g程度の小球根が残ります。中には、2枚目の葉を出すものがあります。
- ⑥ 肥料は、1・2年目には特に必要ありません。3年目には液肥か、低度化成肥料等を少し施します。
- ⑦ 2年目の10月～11月に堀上げ、大きさ別に分けて再度植込むと、2年後には花が咲きます。生育条件がいいと種を播いて3年目に花が咲きますが、大部分の開花は4年目になります

球根を植えてみよう

カノコユリは、環境条件がいいと年々球根が肥大してきます。この10年間カノコユリの普及に携わってきたなかでみた最大の球根は、直径13cmありました。ただ、この球根は2球に分球しており、



分球していない球根では直径10cm・球根重量433gでした。球根の大きさと花の数は比例しており、球根が大きくなるほど咲く花の数は増加します。

花が咲き始める球根の大きさは、早いものでは10gで咲くものもありますが、これはごく一部で、15gではほぼ半分の球根が花をつけ、20gではほぼすべての球根が花をつけます。

30gになると2～3輪、40gでは3～4輪、50gになると4～5輪と球根が大きくなるほど花の数が多くなり、大きな球根では20輪以上の花を咲かせます。

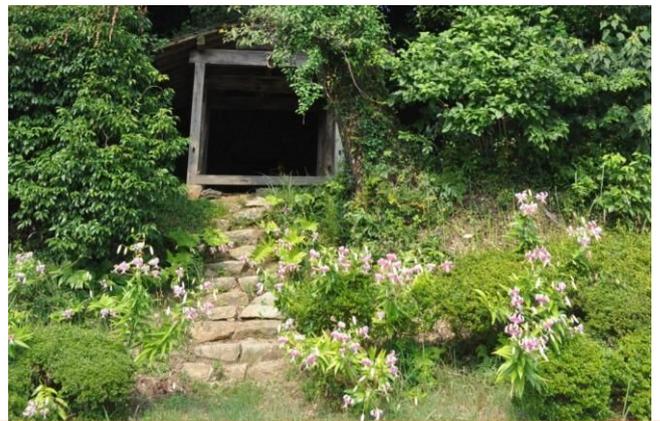
ただし、これは土壌・水・日照などの環境条件が良い場合であり、これらの条件が悪いと逆に小さくなり、花を咲かせなくなって枯れてしまいます。このため、カノユリの好む場所に植えることが大切です。

① 土壌

自生しているところを見ると、赤土で粘質土の傾斜地に多くみられます。乾燥には強くないようで、砂壤土の真砂土はあまり好みません。ただし、過湿も好まないのも、粘土質の土壌では傾斜地などの水が停滞しない条件を好みます。

② 日照

カノコユリは半日陰を好みます。自生地を見るとほとんどが山裾の傾斜地で、上部には木が茂り、半日は日が陰る所です。こうしたところがあれば最適ですが、庭などでこうした条件でなければ、落葉樹等の下、家の北側・東側などの半日陰になるところに植え、土が乾かないように有機物などでマルチすることが大切です



③ 水

カノコユリは、土壌が乾燥してくると下葉が薄緑色から黄色っぽくなり葉を落とします。特に、花が咲き始める7月中旬以降、高温乾燥で水が不足すると下葉が落葉します。そうになると、球根は小さくなって翌年は花数が少なくなり、ひどいと花が咲かなくなります。

しかし、この時期に十分灌水を行うと葉が枯れることなく生育し、球根は大きくなりますので、乾燥しやすいところでは1週間に1回程度の間隔で、根がある30cm位の深さまで水がいきわたるように、たっぷり灌水することが大切です。」



8月の開花期はもとより、種が熟す10月まで葉がついていることが大切

④ 球根の植付深さ

ユリは球根の下から出る下根と、茎の地下部から出る上根があります。下根は、球根から茎が伸びだす生育の初期に活動し、茎が伸び上根が出てくるとこの上根が肥料を吸って生育し、球根が太ります。

そのため、ユリの球根はこの上根が十分張れるように深植えすることが大切です。通常球根の2～3倍の深さに植えます。



植付深さは球高の3倍位の深さとする



プランターに5球植とする。



10年間の活動

故郷の宗像を、花があふれるまちにしたい。花に囲まれた、心豊かな暮らしができるまち宗像を夢見て、ガーデニング作りを進めていた平成22年のある日、県庁時代の先輩である谷井博美市長に会った時に、絶滅が心配される宗像市の花カノキュリの復活に力を貸してほしいと要請されたのが、カノキュリと関わるきっかけでした。

市内のカノキュリは、都市化に伴う山野の開発、農家の減少と農業の機械化などによってカノキュリに適した生育環境が破壊され、自生のカノキュリが見られなくなってきています。

平成22年から、むなかた水と緑の会で実態調査を始めた折、時を同じくして九州大学・園芸学研究ユニットが「絶滅危惧種カノキュリの保全に関する研究」を、宗像市人づくりでまちづくり事業を活用し開始されています。このため、23年の夏・秋には、それまで集めた情報をもとに一緒に生態調査を行いました。この時に採取された葉のDNA解析が九州大学で行われ、宗像で連綿と生きてきた宗像固有のカノキュリが見つかりました。

これを受けて、市とむなかた水と緑の会では宗像固有種の普及に取り組むこととし、持ち主に相談して毎年種子をもらいうけ増殖を始めました。また、多くの市民の皆さんにもカノキュリに親しんでもらうため、24年度から種まき講習を始め、参加者にはプランターに播いた種を自宅に持ち帰って育ててもらっています。

種まき講習は、毎年2月に開催しており、これまでに延べ30回以上開催し、1000名を超える市民が自宅でカノキュリを育てておられます。24年度の講習会に参加された人は、28年

の夏には花が咲き、その後の参加者も順次花が咲いており、多くの人から講習会でもらったカノコユリに花が咲きましたとのうれしい声を聞いております。



種まき講習の実習



種まきから3年目の開花状況

カノコユリは、生育環境に非常に敏感な植物で、適した環境のところに植えて、地域住民が関心を持ってほんの少し手助けをする必要があります。このため、カノコユリの育成についての正確な知識と経験を持ち、地域の中核として活動できる人が多く必要です。こうしたことから、平成26年1月に宗像カノコユリ研究会を設立して、カノコユリの栽培・研究・増殖、そして普及方法を協議、実践するための活動を続けてきました。

平成27年には、宗像市の助成金を活用し、意欲的にカノコユリの勉強をしようとする人向けの「宗像市の花カノコユリの里づくり」と題した小冊子を作成しています。

種を播いて育成した宗像固有種のカノコユリが開花し始めたことから、市民にカノコユリの花を見てもらうために、平成28年8月1日～7日の1週間、吉田花園でカノコユリ鑑賞会を開

催し、来場者にはカノユリの種をポットに播いた1年生苗を配布しました。

令和元年7月には、山田ホタル公園で第4回目の鑑賞会を開催しており、これまでに2000鉢余りの苗を配布、3年前にももらった苗に花が咲きましたとの話も聞かれました。



カノユリ鑑賞会の会場

また、28年秋には宗像市山田のほたる公園と宗像市釈迦院の釈迦院広場に球根を植え、いつでもカノユリが見られるようになりました。

これまでの4年間で、ホタル公園には1600球、釈迦院広場には250球の球根を植込んでおり、7月中旬から8月上旬にかけて赤・桃・白などの多様な模様の花を見ることができます。



山田ホタル公園のカノユリ



釈迦院広場のカノユリ



公園へのカノキュリ球根の植付け

28年からは、種まき講座参加者へのフォロー講座としてカノキュリの花の見学会や実生苗の球根植替講習会、JR3駅への展示、平成30年からは開花球根の植付講習会も始めました。

さらに、令和元年には城山中学校の花壇や赤間宿のプランター、日の里の土手に植込むなど活動の輪を広がってきました。こうした活動によって、市内のあちらこちらにカノキュリの花が見らてるようになってきたことをうれしく思っています。



フォロー講座の見学会



フォロー講座の球根植替実習



城山中学校での球根植込み



球根の植付講習



J R 3 駅（東郷駅・赤間駅・教育大前駅） へのカノコユリの展示

今回、この10年間の活動で得られた知見をもとに、今後のカノコユリの普及に向けた市民活動の参考としていただけるよう、「宗像市の花カノコユリの里づくりの改訂版」を発刊しました。

この小冊子を活用していただき、カノコユリのことをもっと知りたい、自分で育てて増やしたい、地域にカノコユリを植えて、絶滅が危惧されるカノコユリの復活に協力したいという人が、一人でも多くなることを期待しています。また、地域や団体でもカノコユリを育てていただき、宗像市固有種のカノコユリが末永く皆さんに親しんでいただけたら幸いです。



宗像固有種カノキュリの球根養成ほ

発 行：宗像カノキュリ研究会

制作者：宗像カノキュリ研究会 会長 吉田博美

この冊子は、「宗像市の花カノコユリ普及定着化事業費」で作成しています。